

ザ・フォッグ

2006(平成18)年8月18日鑑賞(ソニー・ピクチャーズ試写室)



監督＝ルパート・ウェインライト／出演＝トム・ウェリング／マギー・グレイス／セルマ・ブレア／コール・ヘッベル／ドウレイ・デイヴィス／マシュー・カーリー・ホームズ／ジョナサン・ヤング／エイドリアン・ハフ／ラデ・シェルベグジャ (ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント配給／2005年カナダ、アメリカ映画／99分)

第2章

発想の面白さで見せる

……最近流行りの(?)細菌系の化け物ではなく、幽霊船が登場する復讐モノは夢とロマンがあるもの……? そして、それをより効果的に演出するのが「ザ・フォッグ」。深く濃い霧に覆われた中で展開される復讐劇の恐さと面白さは……? そしてその行き着く先は……? なお、あなたが法学部の卒業生なら、この復讐劇を生んだ原因が「契約不履行」にあることを、しっかりと指摘しなければ……。

「契約」は守らなければ……?

今年の夏は『パイレーツ・オブ・カリビアン/デッドマンズ・チェスト』(06年)が大ヒットしたが、この映画のテーマは、ジョニー・デップ扮するキャプテン・ジャック・スパロウが深海の悪霊デイヴィ・ジョーンズとの間で交わしていた「血の契約」。すなわち、ジャック・スパロウは13年間の契約期間が切れた後、永遠の労役に服する旨の契約にサインしていたのだった。

したがって、その契約の履行を迫って深海の魔物クラーケンが、ジャック・スパロウを追ってきたのは当然……?

それと同じように、この『ザ・フォッグ』でも重要なのは契約。オレゴン州にある小さな港町アントニオ・ベイは今、このまちの繁栄を築いた4人の英雄、デヴィッド・ウィリアムズ、パトリック・マローン、ノーマン・キャッスル、リチャード・ウェインの銅像を立て、まちの創立記念日にそのお披露目と祝典を開く

準備で大わらわだった。しかし実は、この4人が約100年前の1871年にとった行動とは……？ それは契約を一方的に踏みじったばかりではなく、残虐非道きわまりないものだった……。

『パイレーツ・オブ・カリビアン』は、ジャック・スパロウ船長が深海の悪霊デイヴィ・ジョーンズから契約の履行を迫られて逃げまどう姿を描くのに対し、この『ザ・フォッグ』は、一方的に契約を破られたうえ非業の死を遂げたブレイク船長（ラデ・シェルベッジャ）たちによる、まちの基礎を築いたとされる4人の英雄の子孫たちに対する復讐物語……？

島の人たちは……？

今アントニオ・ベイのまちは繁栄しているが、今を生きる若者たちはその繁栄の基礎を知らないし、先祖たちの行動をロクに勉強しようともしない。こりゃまるで、今の日本の経済的繁栄の中、今ドキの若者が「あの戦争」の意味や先祖たちの行動をロクに勉強しないのと同じ……？

それはともかく、釣り客のチャーター船の船長をしているのが、主人公のニック・キャッスル（トム・ウェリング）。そして、その船の一等航海士がスプーナー（ドゥレイ・デイヴィス）で、ショーン（マシュー・カリー・ホームズ）はニックのいとこ。

他方、島の唯一のラジオ局のDJが、美しく魅惑的な声の持ち主でシングルマザーのステイーヴィー・ウェイン（セルマ・ブレア）で、その一人息子がアンディ（コール・ハッペル）。また、ステイーヴィーと仲のよい島の気象予報士がダン（ジョナサン・ヤング）。

こんな島の人たちは、それぞれの持ち場で働き楽しんでいたが、そんな時突然この島に帰ってきたのが、ニックの恋人のエリザベス・ウィリアムズ（マギー・グレイス）。エリザベスは仲の悪い母親のキャシー・ウィリアムズの元を飛び出してニューヨークへ行ってしまったのだが、なぜかいつも幽霊船が登場する怖い夢を見ていた。そこでこの夢の原因を探ろうと思って、故郷の港町へ帰ってきたのだが……？

復讐する側は……？

他方、復讐する側は、100年以上前に死亡したブレイク船長以下の面々……。時は1871年。深く濃い霧が立ち込めるある夜、ブレイク船長が指揮する大型帆船はアントニオ・ベイの沖に停泊していた。これは、島の人たちとある「契約」を交わすため。そして、契約書を持って船の中に乗り込んできたのが、島の英雄として今銅像を建てられている4人だった。

ところが、彼らはここで一方的に契約を破棄したうえ、何と船員たちの命を奪い、船内からすべての財宝を強奪したうえ、船に火をつけ乗客もろとも船を海の奥深くに沈めてしまった。

したがって、100年以上経ってもその恨みを忘れない、この船の船員や乗客たち全員が復讐する側のスタッフ……。このような幽霊の姿をどのようにうまくスクリーンに描くのが、こんな恐怖映画の成否の分かれ目だが、さてその出来は……？

ちなみに、この『ザ・フォッグ』には、ジョン・カーペンターによる1980年版もあり、プレスシートには今回の05年版との対比が、「ジョン・カーペンター研究家」の鷲巣義明氏によって解説されているので、興味のある方はそのお勉強も……。

悲劇の開始は深く濃い「ザ・フォッグ」から……

この映画のポイントは、焼き払われる帆船の悲劇と復讐に立ち上がった(?)幽霊たちの姿を、いかに美しく幻想的に、しかも恐怖感タップリに描き出すかということだが、白く深い霧はそれだけで幻想的だから、「ザ・フォッグ」はその効果を高めるうえで非常に有益。したがって、その美しい映像は、実際にスクリーン上で確認してもらいたい。

他方、「ザ・フォッグ」にはもう1つの効果がある。それは、深く濃い霧が立ち込めてくるのが、悲劇の前触れを示すことになるということ。気象学的には全く説明のつかない濃霧の発生を最初にDJのステイーヴィーに知らせたのは、もちろん気象予報士のダンだが、さてそれによる最初の犠牲者は……？ そして、

それに続く復讐劇の数々は……？

面白い小道具は懐中時計とヘアブラシ

「幽霊モノ」では現在と過去を結びつけるなんらかの仕掛けが必要だが、この映画で現在と1871年の悲劇を結びつけるそれは、2つの面白い小道具。すなわち、船の沈没とともに海底深く沈んでいた懐中時計とヘアブラシがそれ。海底深く沈んだものが、なぜ100年以上経って、波打ち際まで流れ着くのかという「科学論争」はこの際やめてもらおうとして、この2つの小道具は当然のことながら(?)、亡霊のたたりで満ち溢れていたらしい……？ したがって、その懐中時計を受け取ったエリザベスや、アンディが拾ったヘアブラシをDJ室に置いていたスティーヴィーの身には……？

これに刻印された文字のアイデアとあわせて、この2つの小道具のアイデアはグッド……。

ターゲットの特定は……？

「ザ・フォッグ」の最初の犠牲者は、ニックの船に若い女の子2人を乗せて沖合でパーティーを楽しんでいたスプーナーとショーン。

もっとも、女の子たちとともにショーンは死んでしまったが、スプーナーだけは何とか生き延びることができた……。しかしその後、スプーナーには警察の取調べが待っていたのは当然……。

こんな復讐劇を見ていると、ブレイク船長たちの「ザ・フォッグ」による復讐は、一体誰をターゲットにしているのかよくわからなくなるが、それはその後の一斉攻撃(?)においても同じ……。もっともよく理解できるのは、濃霧が4人の銅像を覆うシーンで、これによって銅像はたちまちボロボロに崩壊していくことに……。

やはり、「ザ・フォッグ」のターゲットは、この祝典の準備に精を出しているエリザベスの母親たちのグループかと思うと意外にそうでもなく、ダンもスティーヴィーも、そしてエリザベスも……。

ここで面白いのは、2人の美女が2人とも海の中に引きずり込まれ、死亡直前

までいきながら、何とか助かること。やはり、映像上はこんなシーンを取り入れるのが1番……？ しかし、私的には、ブレイク船長たちが「ザ・フォッグ」の中で展開する復讐劇のターゲットが特定されていないのが少し不満……。まさか無差別攻撃で、鳥の人たち全員を殺すことが目的ではないと思うのだが……？

アッと驚く結末は……？

この映画では、次から次へと展開される「ザ・フォッグ」の中での幽霊たちの復讐劇が見モノだが、何回か観ているとだんだんとその行動パターンが見えてくる。したがって、次第に興味の対象はどんなラストになるのかなということに……。そこで、この映画が用意したアッと驚く結末とは……？ それはここでは絶対に書けないので、映画を見てのお楽しみに……？

ちょっと注目、番外編その1……？

しかし、ここでちょっと注目してもらいたいのは、ブレイク船長も意外に女好きだったということ……？？？ もっとも、映画を観ていても少しわかりにくいので、よく注目する必要があるが……？ そしてここで、私の博識ぶりを少し披露しておこう。

呂布と董卓を仲違いさせるべく、王允が美しく成長した養女、貂蝉を提供するという「連環の計」は『三国志』で有名な話。また、呉と越が戦った春秋時代に「臥薪嘗胆」の言葉が生まれたのは、世界四大美女の1人西施を越王勾践が呉王夫差に提供したのがきっかけ。ちなみに、「傾国の美女」とはここから生まれた言葉。このように中国では、昔から女性の色香で敵を落とすことは当然の知恵とされていた。

しかるところ、近時の日本では、海上自衛隊の1等海曹が1年2カ月の間に8回も無断で上海に渡航していたことが発覚し、懲戒処分を受けたが、これは中国人女性とカラオケ店で密会するためだったことが判明。また、上海の日本総領事館で通信事務を担当していた職員が遺書を残して自殺した背景に、中国人女性との密接な交際があったことも判明している。これらはやはり、日本人（男性）の脇の甘さ……？

もしブレイク船長が100年以上海底に眠っていても、なおかつ好色な男性だとわかっていたら、最初から絶世の美女を彼に提供しておけばよかったのかも……？ こんな解釈がスケベオヤジ映画評論家である私にとって、1番わかりやすく面白いのだが……？

ちょっと注目、番外編その2……？

他方、『シックス・センス』（99年）や『サイン』（02年）、『ヴィレッジ』（04年）等で有名な M. ナイト・シャマラン監督ばり（？）のミステリー風に解釈すれば、やはりエリザベスが毎晩見る幽霊船の夢と、その原因解明のために島に戻ってきたところが大きなミソ……？

ストーリーの中では、エリザベスはニックの恋人であり、その多くはニックと行動をともにしているが、1人の時も「ザ・フォッグ」に襲われたし、ニックと2人の時もずっと「ザ・フォッグ」に追いかけれればなし。しかも、エリザベスはキャシー・ウィリアムズの娘で、「4人組」の1人デヴィッド・ウィリアムズの血を引くオンナだから、復讐のターゲットにされるのは当然……？ ところが、この映画では何とも意外な結末に……。

それを『キネマ旬報』9月上旬号の「REVIEW 2006 Part 2」では、今野雄二氏が、「……という〈秘密〉ももう少し丁寧に説明すべきだろう」と批判している（104頁）ので、興味のある方は是非それも……。

2006（平成18）年8月19日記

裁判員制度と神との契約

09年5月までに実施される裁判員制度のため現在広報活動が展開され、最高裁も映画『評議』『裁判員』を製作して啓蒙活動に躍起だが、その浸透度はイマイチ。日本人が裁判員になるのを嫌がる理由は、「私は素人だから」ということ。しかしアメリカでは、素人が有罪・無罪を判断するのは当たり前。その差はなぜ生まれるのか？ それを坂和流に大胆に断言すれば、欧米キリスト教社会では人間のすることは誤りがあつて当然という諦め（居直り？）を前提としているため。所詮、人間の判断には限界があるという価値観だ。しかし「最後の審判」は誰が？ それは言うまでもなく神が下すもの。

また人間は罪深き存在だから、悪いことをするのは当たり前。したがって、人間が人間を裁く裁判は神の目からみれば所詮仮の姿であり、誤りがあつて当然。そんな前提で成り立っているのが陪審制なのだ。ところが日本では、裁判官は限りなく神の領域に近づき、絶対的真実を発見することが要求されている。しかし実はこれは所詮ムリなこと。また、「偽証しません」という証人の宣誓は日本では単なる儀式だが、聖書に手を置いた欧米の宣誓は、「嘘ついたら針千本飲ます」という神との

契約を前提としたものだから、その重みの違いは歴然。

『ザ・フォッグ』を観れば、西欧文明社会では、人間同士の契約でも「契約は守らなければならない」という大前提があるが、明治維新後、西欧文明諸国の契約概念を輸入しただけの日本では、その前提の理解が不十分。まして、陪審制の大前提である、人間と神との契約の存在やその意義の重さについてはほとんど理解できていない。無信仰な日本人が裁判員制度に参加するためには、陪審制におけるそんなキリスト教的前提を学ぶ必要がある。つまり、最終的には神様が正しい判断を下してくれるのだから、良くも悪くも自分のレベルで判断を下せばいい、それが人間のできる限界だ、という一種の居直りが必要なわけだ。このように、その実施にあたっては、制度論や技術論だけではなく、本質論の啓蒙が不可欠。そしてそのためには、坂和流評論を基に『十二人の怒れる男』（57年）、『アラバマ物語』（62年）などの陪審映画の名作やジョン・グリシャム原作の『レインメーカー』（97年）、『ニューオーリンズ・トライアル』（03年）などのリーガルサスペンス映画の傑作を観るのが最適……？

2007（平成19）年3月12日記